

使節団の多角化

——現代の国際日本研究の新たな流れ

ニコラス・ランブレクト

私の専門分野は日本近現代文学で、とりわけ第二次世界大戦後の日本への引揚げに関する文学的表象について研究している。また、大阪大学では、「グローバル・ジャパン・スタディーズ」という大学院等高度副プログラムで、国際日本研究に関する英語科目を担当している。ここでは、私の研究と教育の両方についてお話ししながら、現在の国際日本研究の新たな流れについて意見を述べさせていただきたい。

まず本稿の構成について説明しておく、最初に「引揚げ文学」というジャンルの歴史と先行研究について紹介したうえで、日本人ではない「引揚者」という、これまでの研究のなかで盲点となることが多かった問題について言及する。そこから焦点を現在の高等教育に移し、大阪大学の「グローバル・ジャパン・スタディーズ」プログラムに見られる現象、具体的には、どのような学生がどのような動機で国際日本研究を学ぼうとしているのか、また、彼らの意識は国際日本研究を学ぶなかでどのように変化しているのかを見ていく。そして最後に、国際日本研究のこれからの展開について考えてみることにしたい。

ところで、「岩倉使節団 150 周年」を記念するこのイベントで、「戦後の引揚げ文学」を取り上げる理由はどこにあるのだろうか。それは、岩倉使節団の時代から、日本の文化、社会、政治も、そして東アジアやより広い地域における日本の役割も、日本への人流と、日本からの人流によって、絶えず形成されてきたからである。岩倉使節団以降、そのような人流が最も大規模なかたちで現れたのは、帝国日本の侵略的な領土拡大にもなう人の大量移動と、帝国崩壊後の大量帰還であった。

日本帝国崩壊後の大量の人の移動は、世界史的観点からも最大級のマイグレーションであり、その移動の重要性は、近年、戦後日本に引揚げてきた数百万人の日本人に焦点を当てた多くの研究により浮き彫りにされている。人文学分野においては、影響力のある文学作品がどのように引揚げを描き、その文学作品は戦後の大衆意識のなかの引揚げ概念をいかに変容させてきたかについてあらためて注目する研究が盛んになってきているといえる。

では、このような引揚げ文学研究は、どのように展開してきたのだろうか。引揚げ文

学作品のうち、最も代表的なものは、1949年に藤原ていが発表した小説『流れる星は生きている』である。作家藤原ていの実体験に基づいたこの小説は、満州で終戦を迎えた母が、幼い子供を連れ、満州から北朝鮮へ逃げ、長い冬を北朝鮮で過ごしたのち、必死に南朝鮮を目指し、さまざまな悲惨な体験を経て、一年後によく日本への引揚げに成功するという物語である。この小説はベストセラーになり、映画化もされ、朝鮮戦争の前にすでに朝鮮語に翻訳されて、朝鮮半島でもベストセラーになった。

その後も引揚げを扱う文学作品は数多く登場した。そのなかには、宮尾登美子の『朱夏』（1980～1985年連載）のように作家自身の満州引揚げ体験を小説化したものや、安部公房の小説『けものたちは故郷をめざす』（1957年）のように作家自身が引揚者でありながらかなり虚構性の高い作品もある。昨日の牛村圭報告のなかで触れられていた竹山道雄の『ビルマの豎琴』（1946年）も、竹山自身は引揚者ではなかったが、見方によっては引揚げ文学に含めることができるかもしれない。また、なかにし礼の『赤い月』（1999～2000年連載）のように、21世紀に入っても引揚げに関する文学作品は絶えることなく書き継がれている。

そのような状況のもと、引揚げ体験を扱う作品の分析に挑んだ優れた研究は、ずいぶん以前から生み出されてきた。特に日本近現代史の視点から作家たちの引揚げ体験を分析した研究が重要な蓄積としてあり、また文学の研究においても、1970年代からすでに、引揚げ経験を持つ作家たちが「外地引揚派」と呼ばれて分析されることがしばしばあった（詳しくは原佑介「『引揚者』文学から世界植民者文学へ——小林勝、アルベール・カミュ、植民地喪失」『立命館言語文化研究』24巻4号、2013年の137～138頁を参照すべし）。しかし、初めて「引揚げ文学」という言葉を用いてジャンルを定義しようとした研究が現れたのは、2000年代の後半に至ってからのことであった。

「引揚げ文学」というカテゴリーの意義を最も強く主張した研究は、朴裕河『引揚げ文学論序説』（人文書院、2016年）であるが、同書の著者は2009年の論文においてすでに、「日本の戦後文学に引揚げ体験および引揚げ体験の後遺症とでも呼ぶべき素材を取り扱った表現者たちが多数存在したことを改めて指摘し、彼らの試みを《引揚げ文学》と命名しておきたい」と述べている（朴裕河2009、123頁）。朴裕河は、それまでの日本文学研究が「引揚げ文学」という対象の把握の仕方を欠いていたことに違和感を抱き、このような欠如に戦後日本の脱植民地化の抱える問題を見出した。

北米では、ちょうど同じ時期に、歴史家のローリー・ワット (Lori Watt) が、*When Empire Comes Home: Repatriation and Reintegration in Postwar Japan* (Harvard University Asia Center, 2009) を出版した。この著書では、引揚げの表象が大きく取り上げられており、戦後日本の社会構造を考えるうえで重要な要素であることが指摘されている。ワットは、たとえば次のように述べている。

As if to challenge the bureaucratic and social attempts to contain, neutralize, and perhaps move

beyond the history of the end of the colonies, repatriation-related short stories and novels, songs, and films embraced that history and explored many of the issues that had been censored, suppressed, or elided by other accounts of the process. (Watt 2009, p. 139)

ワットもまた、朴裕河と同じ時期に、検閲などにより見えなくされていた歴史的経験を捉えなおす手がかりとなりうるものとして、引揚げ文学に注目していたわけである。この分析は、近年の英語圏の日本研究において重要な成果の一つだといえるだろう。

現在、日本の引揚げ文学に関するこのような研究は、戦後日本文学のカノンを捉えなおすための重要な視角の一つとなっている。より広い文脈では、このような研究は、戦後の人の移動と未完の脱植民地化が現代日本の形成に果たした役割を理解しようとするときに、不可欠なものである。日本国内で行われてきた文学研究があったからこそ、朴裕河やワットの研究が可能となったことはいうまでもないが、日本内外両方の経験を持ち、活躍している研究者だからこそ、「引揚げ文学」のような、陰に隠されたものを照らし出しうる新たな研究対象を立てることができたともいえるだろう。ここにこそ、国際日本研究の重要性と必要性があるといえる。昨日コメンテーターを務めた五十嵐恵邦は、米国を拠点として英語と日本語で研究活動を行っており、復員兵への言及も含む著書『敗戦と戦後のあいだで——遅れて帰りし者たち』の日本語版（筑摩書房、2012年）と英語版（*Homecomings: The Belated Return of Japan's Lost Soldiers*, Columbia University Press, 2016）との両方を自身で執筆しているが、国際日本研究の実践としてはそのようなかたちが一番効果的なのではないだろうか。

ただし、現在の引揚げ研究も引揚げ文学研究も、日本の歴史だけあるいは日本の文明だけを理解するために行われているわけではないはずである。戦後日本への引揚げに関する研究は、別の場所で今も発生しているディアスポラ問題や難民問題を理解するための示唆を含むものでなければならない。そのためには、歴史的事実をナショナルな枠組みで分析する傾向から脱却する必要があると私は考える。

たとえば、最近の英語圏では、同じ船を使ってなされた、戦後日本への引揚げと朝鮮半島への送還を合わせて扱う研究が現れ始めている。マシュー・オーガスティン（Matthew Augustine）の“The Limits of Decolonization”（*International Journal of Korean History*, 2017）やジョナサン・ブルとスティーブン・アイビンス（Jonathan Bull and Steven Ivings）の“Korean Repatriation and Historical Memory in Postwar Japan”（*The Asia-Pacific Journal: Japan Focus*, 2020）がその例である。オーガスティン論文はSCAPの朝鮮人送還対策を分析したものであり、ブルとアイビンス論文は舞鶴湾で起きた数百人のコリアンの人びとが亡くなった浮島丸事件の記憶についてのものである。これらの論文は両方とも英語の repatriation という言葉を使用し、朝鮮半島への送還を分析しているが、この repatriation という単語は「引揚げ」の英訳にもなっている。つまり、これらの研究は、「日本からの送還」と「日本への引揚げ」を同じ言葉で捉えることで、しばしば日本独特の歴史として語られる「引揚げ」を、よ

り広い人の移動の文脈に置き換えて可視化することを可能にし始めているのである。

こうしたテーマと関わって、最近日本語で刊行された学術書としては、『帝国のはざまを生きる——交錯する国境、人の移動、アイデンティティ』（みずき書林、2022年）がある。本書は、日文研の国際共同研究の成果として刊行された論文集で、ここには、在日コリアン作家李恢成の樺太から「内地」への移動を「引揚げ」と解釈して論じた拙稿が収録されている。日本人ではない作家李恢成が、日本人と同じように「外地から内地へ引揚げる体験」について書いた作品は、引揚げがはらむ多様性を示している。このような研究プロジェクトを、日文研と「国際日本研究」コンソーシアムが支援の対象に選定したのは、とても意義の大きいことであったと考える。

そして、今後この種の研究は、より多様な方向へと発展していくだろう。先述したように、日本の引揚げ文学をアジアやそのほかの地域の文学と合わせて研究することによってのみ、戦後の日本への引揚げを、戦後の大規模な海外移住、旧植民地間の移住、その後の冷戦に強く影響された国際的な人の移動の文脈のなかで適切かつ正確に捉えることができるようになる。つまり、日本の引揚げ文学の研究の現状は、国際日本研究の必要性、とりわけそれが多角的に展開される必要性を示しているといえるだろう。

そのような国際日本研究が展開されるようにするためには、その担い手となるべき研究者を育成することのできる教育プログラムの役割が極めて重要となる。多くの機関で「国際日本研究」が掲げられ、「国際日本研究」コンソーシアムが結成されるに至った背景には、このような問題意識があるといつてよい。筆者が勤務している大阪大学大学院人文学研究科の大学院等高度副プログラム「グローバル・ジャパン・スタディーズ」(GJSプログラム)の発展を紹介しておく、図1に示したように、このプログラムの登録者数は順調に増加しており、なおかつ、図2のように、英語で受講するGJSプログラム上級科目の履修者数も、プログラム外からの履修者も含め、ここ数年大幅に増加している。

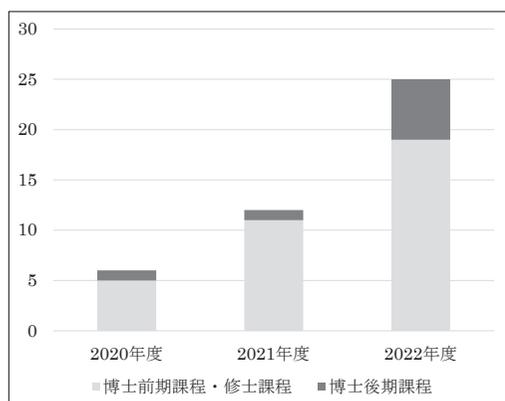


図1 GJSプログラムの登録者数

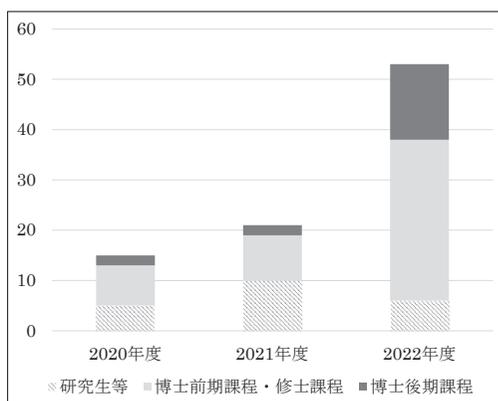


図2 英語で受講するGJSプログラム上級科目の履修者数の増加

これらの科目がどのような内容のものか簡単に紹介しておく、大まかにいって、三つに分けることができる。まず一つめは、学生が自分の専門的な研究内容を英語で発信するスキルを身につけるための科目である。日本で行われている新たな研究を海外のオーディエンスに向けて発信できる人材は、今の時代にどうしても必要であるだけでなく、日本語以外の言葉で自分の研究を考えなおすことで、日本語で書いている時に無意識に働いている偏見、思い込み、もしくは不完全な前提に気づくという効果もある。二つめは、逆に、海外で行われている日本研究を学ぶための科目である。幅広いトピックスを扱う海外の論文を授業内で講読することにより、日本国内の研究とは異なる観点から問題を捉えなおす機会を得ることができる。そして三つめは、翻訳関連の科目や、日本研究の境界を再考する科目である。かなり専門性の高い内容であるが、このような科目の受講生が特に増加している。このなかには、私が教えている引揚げ文学に関する授業も含まれている。

ではなぜ、このように受講者が増えていったのだろうか。最後に、その背景について、簡単に記しておきたい。

まず、日本の高等教育機関で学ぶ学生たちの国際的な流動性の高まりにその一因を求めることができるだろう。履修者の多くが、そのような流動性の一端を担っている。よくも悪くも、世界各国から日本へ学びにきた学生は、今まで日本でのみ過ごしてきた学生よりも、英語が使用言語となっている授業を積極的に履修するため、海外からの学生が増えれば増えるほど、「グローバル・ジャパン・スタディーズ」科目の履修生も増えていくだろう。また、日本人の学生にそのニーズを感じられる環境を作らないかぎり、彼らは現在起きている国際日本研究ブームに置いていかれるおそれがあるため、国際日本研究の必要性を日本人学生にも分かりやすく示す必要がある。

また、国際的な流動性が高まりつつあるなか、日本研究は、それ自体を目的とするのではなく、グローバルな理論的枠組みの批判的検証に貢献する有用なケーススタディとして機能する必要があると認識されるようになってきた。特に、国際日本研究の領域において3言語、4言語を使用することは、研究の視点を刷新する上で、極めて重要であることが意識されつつある。とりわけ私が専門とする文学研究の領域では、多言語で活躍できる人材こそがこれまでになかった視点を獲得していくことは間違いない。

この新たな研究の視点は、日本を単に中心化したり脱中心化したりするのではなく、多角的な視座のもと日本を適切に位置づけることを可能にする。このような視座を方法化していくことこそが、今後の国際日本研究には必要であるだろう。「グローバル・ジャパン・スタディーズ」プログラムの担当者として、私自身もそのような方法化に貢献していきたいと考えている。

参考文献

- 蘭信三・松田利彦・李洪章・原佑介・坂部晶子・八尾祥平編『帝国のはざまを生きる——交錯する国境、人の移動、アイデンティティ』（みずき書林、2022年）。
- 五十嵐恵邦『敗戦と戦後のあいだで——遅れて帰りし者たち』（筑摩選書、2012年）。
- 朴裕河『引揚げ文学論序説——新たなポストコロニアルへ』（人文書院、2016年）。
- 朴裕河「引揚げ文学論序説——戦後文学のわすれもの」『日本學報』第81号、2009年。
- 原佑介「「引揚者」文学から世界植民者文学へ——小林勝、アルベール・カミュ、植民地喪失」『立命館言語文化研究』24巻4号、2013年。
- Augustine, Matthew. “The Limits of Decolonization: American Occupiers and the ‘Korean Problem’ in Japan, 1945–1948.” *International Journal of Korean History* 22:1 (2017), pp. 43–75.
- Bull, Jonathan and Steven Iving. “Korean Repatriation and Historical Memory in Postwar Japan: Remembering the Ukishima-maru Incident at Maizuru and Shimokita.” *The Asia-Pacific Journal: Japan Focus* 18:21:5 (2020), pp. 1–21.
- Igarashi, Yoshikuni. *Homecomings: The Belated Return of Japan’s Lost Soldiers*. Columbia University Press, 2016.
- Watt, Lori. *When Empire Comes Home: Repatriation and Reintegration in Postwar Japan*. Harvard University Asia Center, 2009.